

# 「再チャレンジ」という物語が持つ意義・展望・課題

ありむら潜（釜ヶ崎のまち再生フォーラム 事務局長）

## 1. 「再チャレンジ」という総合テーマについて

私がこの街にやってきたのは1975年。真っ先に聞いた言葉、読んだ言葉は「釜ヶ崎は人生の終着駅」「希望無き街」。完全雇用神話が通用する高度成長期の真ただ中でもあったので、「例外の街」、「丸ごと見捨てられた街」でもあった。そして、40年以上の時間が流れた。さまざまな出来事を経て、この提言書の総合テーマは「再チャレンジのまち」だ。天と地ほどの違いと言える。これがあいりん地域まちづくり会議の本会議やいくつもの部会での住民議論、そして行政との協働作業を経て出てきたことは実に画期的である。個人的にも感慨深い。

提言では再チャレンジのためのツールもいろいろ揃える。技能講習や就労訓練（西成労働福祉センターなどの機能強化）、自分探しや各種障害等で就労困難な若年層への伴走型支援体制の充実（就労・福祉・ハウジングのサービスハブ構築でトータルケア・ネットワークの充実）、起業可能な新規流入層支援（まずは屋台経営などのモデル事業群）、高齢単身者の居場所づくり（民間空家などによる拠点構築）、そして表現活動が街角にあふれるまちづくり等である。

突然の思いつきで「再チャレンジ」が出てきたわけではない。90年代末からの先行的模索期があり、この地域としては必然の流れである。今まで足りなかったのは、こうした方向性を引き出す、ボトムアップ型の各種話し合いの場と、これに協力・連動する行政側の体制と覚悟（リーダーシップ）だけだったのだということをここで述べたい。

併せて、提言書の「11 まちは舞台だ」及び「09 今は無いところから新しいものを生み出す」という計3項目についていくらか補足したい。

### 1) 西成やあいりん地域は「ヒトとモノを集める力に満ちた一帯」にある（これが提言の基盤）

あいりん地域まちづくり会議の有識者委員である水内俊雄教授の資料で示された、この一帯の見方（パースペクティブ）は示唆に富んでいる。阿倍野・天王寺公園・新世界・釜ヶ崎などを含むJR新今宮駅西側の国道26号線あたりまでの環状線沿い一帯は「大大阪時代」から交通の要衝であるがゆえに、日本国中から産業やエンターテインメントや労働力を、つまりヒトやモノを惹きつけてきた「地力（ちりよく）と磁力（じりよく）の街」であった。大阪の玄関口はいつのまにかキタ方面であるようになってしまったが、もともとは浪速の街の玄関口は南側を向いていたという。紀州街道沿いに豊かな歴史や文化も先行的に存在した。1960年代になってから、行政が単身男性の建設日雇い労働者をこの一帯の一画に集住させていった（あいりん地域）のも、この文脈の中に入るとどこまで考えてのことか定かではないにしても。

2) この地域は社会を下層移動する貧困層をも惹きつけていき、「人生の終着駅」と呼ばれつつも、それでも懸命にしたたかに生きようとする人々の、独特の都市空間となった。今でもそうである。

この街があってこそ日雇い仕事や社会福祉サービスにアクセスすることができる人々のエリアとなった。行政施策は後手後手にしか機能しない中で、個々の支援団体の個別奮闘で、特有の支援ノウハウの蓄積とインフォーマルな連携の形成で（社会制度の谷間での独自のささえあい）、なんと

かなっていた。最貧困層にとつての最後のセーフティネットの地となった。今日の言葉で言えば、まさに「サービスハブ」だった。自然発生的な。

ただ、ネガティブ・イメージ（スティグマ）もあって一般社会に開かれるというベクトルも無く、内側から社会（再）参加へ向かうというベクトルも実質的に無かった。理由は、「世間」つまり市民社会に対する反発感情も根強く、まちづくりの発想も育っていなかったので、この街を社会への再参加（人によっては、初参加）、そのための再チャレンジの起点にするというところまではいかなかったからだ。

3) 1990年代後半のホームレス問題最悪期（大阪市内で8660人の野宿生活者）の惨状を経て、数次にわたる生活保護行政の改善もあり、脱野宿を果たす人々が増え、地域住民として生き直していく課題が登場し、ようやく社会（再）参加が課題として意識されるようになった。

1999年の連合大阪主催のホームレス支援シンポジウム等で「社会的包摂」（ソーシャル・インクルージョン）の考え方が提起され、それも支援団体や行政の心をじわじわととらえていったことも個人的には記録しておきたい。

私たち（釜ヶ崎のまち再生フォーラム）の場合は、2003年の統一地方選挙で「投票にいこう！社会再参加キャンペーン」という、投票呼びかけの行動を、5政党の候補者による討論会開催もしつつ、地域支援団体やサポーターハウスの協力を得て、展開したことがある。2005年頃には、「月例まちづくりひろば」でまちづくりビジョン第3ステージ（中長期目標）づくりをした。その中で今後のこの街のコンセプト案の一つとして「やり直しや生き直しができるまち」「再チャレンジができるまち」という言葉がごくごく自然に共有されたことがあった。

しかし、当時は無かったもの、それはこうした方向性を地域合意として引き出す、住民団体によるボトムアップ型の各種話し合いの場と、これに協力・連動する行政側の意志と体制だった。

4) 今日では「サービスハブ」という国際的な地理学用語があり、提言にも（あいりん地域バージョンにアレンジされて）あちこちで登場する。サービスハブとは、我々一般人としてはとりあえず「生活困窮者等への多様な社会福祉サービスの集積拠点」程度の意味と考えればよいと思う。多くの大都市には最低1～2カ所は存在するとされる。そして、広がる格差社会でどこかがそうした役割で貢献しなければいけないとすると、これまで、及び今後も、大阪ではあいりん地域がそれを引き受けざるを得ないのかもしれない。それならば、それを引き受けるサービスハブ地域としてそれ相応に社会的・行政的（予算も伴って）評価を受けるべきであると考ええる。

ただし、これまでと大きく異なるべきは「いろいろ人生に困難があったけれど、この街でなら自分の能力を磨き、日常生活で、社会生活で、自分探して、就労生活で、（再）チャレンジができるまちである」という明確な機能を発信することではないだろうか。

しかも、社会（再）参加とは西成区を出ていくこととは限らない。就労を開始し、継続し、あるいは起業して、西成区に住み、若い人なら結婚や子育てなどもする。そして、地元のまちづくりの担い手にもなるということ成し遂げられるまちであれば良いのだ。

そうしなければ、「これ以上、貧困層を我が町に集めてくれるな」という、特に町会長さんたち（萩之茶屋連合振興町会は10の基礎単位町会から成る。三角公園付近から南側一帯は今

宮連合振興町会に属する)に長年積もっている痛切な声を受け止められないし、協力は得られない。

5) また、サービスハブとしてこの地域で磨かれた支援のノウハウ、特に社会福祉制度の谷間の層への支援のノウハウを一般地域へ伝播させる、課題&実践先端地域として明確に位置づけられれば良い。これは、地理学的概念であるサービスハブ論の西成的発展と私は呼びたい。

しかも、2015年に施行された生活困窮者自立支援法とその全国展開がきちんと推進されれば、このように「サービスハブ」論と「再チャレンジのまち」論を並立させることを後押しすると私は考えたい。なぜなら、この法律は「もう西成・あいりん地域のような貧困集中地域に生活困窮者は駆け込まずとも、住んでいる地元基礎自治体で相談をきちんと受け止め、その地域ネットワークで対応できるようにしなさい。そのための法律と制度です」という趣旨だからである。

## 2. 提言「09 『いまはないもの』が生まれるまち」について

6) 行政施策が、後追いになるという意味で、十分に機能しない街であったし、生活の中に有るべき「前提となるべきもの」が無い人々の街でもあるので、オリジナルに「いまはないもの」が生まれることは必然であった(生み出すしかなかった)。この発想はこの地域の得意技であり、伝統でもある。これが地域としてのレジリエントな(竹のようにしなやかで弾力性のある)強さにつながっている。これからこの伝統は良きものとして継承・発展させたいものだ。

ただ、これはフォーマルな制度があつてこそその“谷間のインフォーマルなささえあいのしくみ”なのであつて、フォーマルな制度の欠陥の改善課題を社会に提起していく役割もこのまちにある。たとえば、この地域から始まった支援付きハウジングで、支援がいつまでもボランティアな善意に依存するのではなく、支援費としてフォーマルに支給される制度づくりを先導していく役割なども続けていくべきだろう。そうしてこそ、西成型サービスハブである。

・公がからんだものも含めて、地域独自のしくみの最近の事例

サポーターハウス、救護施設革命と言われた旧今池平和寮の居宅移行&通所支援システム(周辺アパートをサテライトとして活用する手法)、ひと花センター、あいりん地域トータルケア・ネットワーク(その通過点としてのあいりん地域モデルケース会議)、西成こどもネットワーク、高齢者特別清掃事業やまち美化パトロールの仕事づくり、バックパッカー・タウンの創出とそこでのベッドメイキングの仕事づくり等々、枚挙にいとまがない。

## 3. 提言「11 まちは舞台だ！街角にあふれる物語のあるまち」について

7) 上記の1)で述べたように、新今宮駅界隈は日本国中から産業やエンターテインメントや労働力を、つまりヒトやモノを惹きつけてきた「地力(ちりよく)と磁力(じりよく)の街」であった。その歴史と伝統が基盤となって、現在でもプロフェッショナルなアートや芸能が生き残り、あるいは新たに生まれている。人々が背負ってくる人生のドラマ、喜怒哀楽やエネルギーが基盤となって、それらを表現するプロのアートや芸能が奇跡的に維持されていると私は考える。人々は「浪速のディープサウス」の文化資源の中に日常的に暮らしている。これは他地域から見れば、大きな強みである。

<例>⇒「11」を参照されたい。

8) しかし、プロフェッショナルなアートや芸能だけが文化ではない。

さまざまな理由から社会を下層移動した人々をも惹きつける街であるがゆえに、人生への希望や焦燥、喜怒哀楽が渦巻いている街である。「人間の街」、しかもしばしば大阪風の「おもしろい街」「庶民の街」である。

だから一人ひとりに人生の物語があり、マグマのようなエネルギーがある。それこそが表現活動の素材となり、基盤となる。そうした街の空気に感化されて、私も表現活動に参加し、拙いながらも漫画家になった。

受け手としてだけでなく、一人ひとりが草の根表現者となりうる潜在力を持っている。たとえば、学生ゼミなどを対象にまち歩きスタディなどをやってみると、波乱万丈の人生を生きてきた一人ひとりの素朴な「語り部」活動すら、聞く者にしばしば感動を与え、広い意味での表現活動であることがわかる。語る側も自分のライフ・ヒストリーや見てきた地域の風景を生き証人として語ると、それをしっかり受け止めてもらえることで他者となつがる喜びを感じ、人生の肯定につながり、やがて生きていく力になる。そうした事例を私はまち案内人として頻繁に経験している。自分史を語ることはタブーではないのだ。人々はほんとうは自分を語りたいのである。表現したいのである。素朴な語りからさまざまなジャンルでの表現活動に進む活動は、アート NPO やひと花センター、西成市民館、各支援団体などで盛んに行われている。これらはすでに、人生の（再）チャレンジ活動である。

9) こうした潜在力を引き出すうえで不可欠なものは、①表現や語りの発表の場が日常的にあること ②表現方法を教える人たち（インストラクター）が存在すること ③継続性を保つには質の高いもの、プロフェッショナルなもの、つまり「ほんまもん」と触れ合えるようにすること、などがあげられる。

この点については、提言の「1 1 まちは舞台だ！」の頁でも挙げたように、実は歴史豊かな西成にはかなりの程度揃っていて、刺激を受けることができるようになってきているのだが、もっと内側に再発見する、もっと創り出す、もっと外から呼び込む。呼び込む力は西成のまちにはどこよりもあると私は考える。「地力と磁力のまち」であるから。

そうして、まちそのものが舞台。そんな西成にしたいものだ。

1 0) このように見ると、表現活動、文化活動はそれ自体の中にチャレンジの要素が含まれており、「再チャレンジのまち」づくりの不可欠な構成要素であることがわかる。

1 1) 以上述べたことと密接に関連するが、この地域は多様で、しかも奥深い「学びのフィールド」でもある。

ホームレス問題（貧困や孤立）、福祉、医療、労働、人権、それにまちづくりプロセスなど、複合的な切り口で学ぶことができるまちとして、特に 2000 年代に入ってから、大学生（海外の大学も含む）や市民、公的団体のスタッフ（JICA や世界銀行なども含む）などがまち歩きスタディ（フィールドワーク）で盛んに訪れるようになった。釜ヶ崎のまち再生フォーラムや萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社などはそれを事業として、まちづくりの進展とタイアップしながら実施している（年間 30~40 回実施し、400 人程を受け入れ）

一方、西成区の学校では児童・生徒・教員たちの地域学習は急速に活発化している。西成情

報アーカイブの活用やフィールドワークによる、歴史・人権・まちづくりなどでふるさとを見直す学習である。特に、いまみや小中一貫校のアクティブラーニング的な地域学習と、それを基礎にした「私たちの8本のまちづくりプロジェクト提案」プレゼンテーションはたいへん感動的な出来事であった。子どもたちもりっぱにまちづくりに参加できることを示した。今後、まちを舞台に、大人たちと子供たちのコラボによる、どのようなまちづくりの物語ができるか、非常に楽しみである。

1 2) 簡易宿所の密集地であることを活用して JR 新今宮駅南側一帯を国際ゲストハウス・エリアとしたのは、2000 年の「簡宿活用ワークショップ」まちづくりひろば開催以来、西成のまちづくりそのものが切り拓いてきたことである。そして今、ますます多国籍者宿泊ゾーンとなっている。これは他の地域にはない圧倒的な西成の強みである。

留学生たちも含めて、中期滞在者らしき人々も目につくようになってきた。インバウンド客を地元商店街につなげることや違法民泊の監視などの課題をこなしつつ、文化交流の機会を確実に増やしていくべきだろう。アートや文化の化学反応が街角にあふれるまちづくりが可能となりつつある。

1 3) 最後に。街角に物語があふれるまちづくりをどう推進していくか。シンプルなかかけが要る。これまで述べたすべての情報を束ね、整理し、発信し、アクションに誘導するしかけとして、西成情報アーカイブに着目してはどうだろうか。すでに「そこにある社会資源」である。ここが地域文化と学びの総合掲示板（サイト）となり、あるいはプラットフォームとなって活用される道があると私は考える。このまちの歴史・文化・教育等の諸活動がそこを介して生き生きと連動していく、そういうしくみづくりを提案したい。ぜひとも、広く議論したいところである。

1 4) 以上のようなことが前進すれば、結果として、西成区全体の大きなイメージアップにつながることは間違いない。楽しみである。